

---

# プレゼント

零崎稻織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プレゼント

### 【著者名】

零崎稻織

N4360E

### 【あらすじ】

プレゼントした物が気に入つてもらえなかつたなんてこと、ありませんか？それはもしかしたら、こんな理由かもしれません。

「ネックレス……？」

名円はあたしがプレゼントしたものを手に取ると顔をしかめた。何よ？さつきまで嬉しそうにしてたくせに。包装紙を開いた途端に顔が曇るとかアリ？てゆーか、そんなに気に入らないわけ？ そんなに趣味悪い物選んじゃったかな？

こちらの様子を伺いつつ、名円は申し訳なさそうと言つた。

「俺、ニーゆーの嫌なんだ。何か束縛みたいで」

「はあ？何ソレ？だつたら捨てれば？」

あたしの口は暴走していた。一応、一生懸命選んで買つた物なのに、そのことを汲み取つてもらえないのはやつぱりショックだし。例え氣に入らなかつたとしても、あたしの前では嫌な顔をせずに受け取つてほしかつた。自分で何を言つてるのかもわからなくなつて、普段なら絶対に言わないようなこともお構いなしに吐き出してしまふ。

「あたしのことなんか、最初から好きじやなかつたんでしょうー。名円なんか、あんたなんか、死んじやえ！」

あたしは言いながら泣いた。涙と鼻水が一緒に口まで流れてきて、気持ち悪い。息も苦しい。今、絶対にぐぢやぐぢやの変な顔だ。そんな顔を見られたくなくて、この場から逃げたくて、あたしは走つた。汚い顔を拭うこともせずにひたすら。だけど名円の足は速いからすぐに追いつかれてしまふ。後ろから腕をグイと掴まれる。それが悔しくてあたしは相手を睨んだ。もつ別れてやるんだ。お望みどおり別れてあげる。どんなに汚い顔でもいいや。名円の前で女を続ける意味なんてない。

そんなあたしの目を見て名円は言つた。

「いめん……」って。

正直、謝るならあんな傷つくようなことをつぶつて思つた。誰

だつて、あんなこと言われたら傷つくよ。だけど、あたしのこと見捨てたわけじゃないんだつてわかつてホッとした。

「何よ」

それでもその気持ちを態度には表せなかつた。

「まだお礼言つてなかつたから。プレゼント、ありがと」

名月はそう言つて後ろからあたしを抱き締めた。

その腕を振り払うことはできなかつた。それは名月の力の強さを知つてたからじゃない。抱き締められるのが嫌じやなかつたから。

嬉しかつたから。

「郁には知つてほしかつた。俺の好きなものも嫌いなものも。だけどそれは間違つてた。郁を傷つけた　俺のために一生懸命選んでくれたうに、ごめんな……」

「何で？何で謝るの？」

あたしはつらかった。名月のこと最低なヤツつて思つたのに、別れてやるつて思つたのに　抱き締められただけで心が揺らぐんて……。

あたしの問い掛けに名月は答えてはくれなかつた。

ただ、あたしが泣き止むまでずっとこうしていてくれるつもりらしかつた。

「あたしは……」

「ほんとごめん」

名月はあたしの言葉を遮つた。

この空氣に耐えられなくて何か言おうとしたけど、自分でも何が言いたかつたのかわからなかつたから助かつた。

「謝るだけ？あたしは名月のこと、何も知らないまま？」

あたしが言うと、名月はポツリポツリと話し始めた。

ネックレスなどを束縛の象徴に感じる　それには以前に付き合つていた女性が関係しているらしかつた。どういう経緯があつて付き合うことになつたかは言つてくれなかつたけど、彼女は年上で社会人だつたようだ。

「南京錠つていうの？そーゆーネックレスをくれたんだけど……」  
その女性は、『名月は私のものだから。だからこれをあげる』って言つたんだそうだ。

だけど名月は誰のものでもない。1人の、“自分”という意思を持つた人間だから、そんなのは許されることじやない。まるで飼い犬にはめられた首輪みたいに、南京錠のネックレスは名月が彼女のものであるという証明になつていたんだろう。それが彼女と別れた原因ではないみたいだけど、名月は嫌な思いをしたんだ。あたしは名月の気持ちを考えてなかつた。あなたのこと、もつと知りたいよ。ペアリングとかすつごく憧れてたけど、何だかどうでもよくなつた。ただ英語じみた響きに惑わされてた気がした。それは他のカップルのまねみみたいなものだし、そんなものでつながつてなくても、お互いを理解り合えたらそれでいいんじゃないかつて。

「それ、返して」

あたしは前を向いたままで言つた。まだ鼻水が止まらなくて、くぐもつたような声になつた。

「返さない」

名月はイタズラっぽく笑つた。

「俺は郁から逃げないから。首にかけるのはまだ抵抗あるけど、大事に取つとく」

「そう。無理しなくていいんだからね？」

「うん。ほんとは……俺が郁を束縛したいと思つてたのかもしけない」

束縛されるのは嫌だけど、束縛したいと思つてたかもしれない自分に嫌気がさして、あんなこと言つたりしたの？

「昨日、隣りのクラスのヤツとつるんでたどろ？」  
名月は俯いた。

「あー、あれは男子つて何がほしいのか聞いてたの。見事に外れちゃつたけど」

これは本当のこと。名月は何もいらないって言つて、だからつて

何もあげないのも変だし。

「そりだつたんだ?俺つてすつげーやなヤツ」

「何言つてんの。あたしはそろは思わないよ」

「あたしを抱き締める名月の力が強くなつた。」

「ねえ、ひどいこと言つていじめんね。あたし、思つてないから。あ

んなこと……」

死んじやえなんて、全然思つてんないから。

「うん。郁は俺を許してくれた。だから、もういいよ」

どれだけこの姿勢でいたんだろう。あたしたちは無言のまましばらくじつとしてた。だけどそれは、全然嫌な空氣じゃなくて、むしろ自然な感じで。黙つていながら、何かを分かち合つているつ正在うか。

今日は名月の過去に少し触れた。あまり自分のことは話してくれない人だから、何だか新鮮だつた。

名月はいつかあのネックレスを首につけてくれるだろうか。あたしの小遣いではあんな安物しか買えなかつたけど、そんなことを気にするような人じやないことは知つてゐる。前の彼女のことを完全に忘れてほしくないつて言つたら嘘になるけど、その人と付き合つたから、今の名月があるつてことも覚えてほしいんだ。

数日後、名月はあたしがプレゼントしたネックレスのチョーンを変えて、キーホルダーみたいにしてカバンにつけてくれていた。

あたしたちの関係は、今まで通り恋人同士だけど、その仲はあの日を境にもつと深いものになつたんだと思つ。

ありがとね、名月。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4360e/>

---

プレゼント

2010年10月8日15時10分発行